山田町合併50周年記念企画
History of yamada town
昭和元年～29年

荒川の開田事業（昭和13年）荒川地区の開田工事は、昭和13年から始まり、昭和24年10月に100㌶の開田を完了した

昭和の三陸地震津波の惨状（昭和８年）
川向町から境田町方向を望んで撮影。
家屋などは流され電柱だけが残っている

山田町役場（昭和10年ころ、御蔵山）

▲スルメ干し作業（昭和10年ころ）水揚げされたスルメは一家総出で割り作業を行い、よろいに掛けられた。シーズンには400㌧もの水揚げがあった

旧船越中学校のバレー大会（昭和27年）当時の女子のスポーツの服装は40年代前半まで続いた▶

国鉄山田線が開通

大正九年、原内閣の時、盛岡―山田間鉄道敷設案が貴族院を通過、総工費二千四百二十万円で、翌十年十月に国鉄山田線は盛岡から着工しました。

昭和十年に国鉄山田線の津軽石・豊間根・陸中山田が開通し、十一年には織笠、岩手船越が開通しました。十四年九月十七日には釜石までの全線（一五七・五㌔）が開通。着工から実に十九年の歳月が流れていました。直通列車で六時間ほどで結ばれ、盛岡と沿岸線を結びたいという悲願が達成されました。山田線の開通は沿岸の産業、文化を興し、しかも高速交通時代を迎えた一大改革でした。

山田線開通記念祝賀会（昭和10年）山田線宮古―山田間の開通を記念し、11月17日に祝賀会が開催され、記念品として鉄瓶が配られた▶

▲魚粕の出荷（昭和初期）大浦地区の出荷風景。イワシを原料とした魚粕は肥料として製造され、三陸汽船で塩釜に運ばれた

▲出征兵士の見送り（昭和18年）出征が決まった兵士は、それぞれの町村の神社に武運長久を祈願した後、親族などに駅まで見送られて戦地へ赴いた

あの日あの時

開田作業に加わった

佐々木キノエさん（荒川・81歳）＝右＝
村上チヨミさん（荒川・85歳）

【佐々木】私が小さかった昭和10年ごろは、荒川地区には田んぼは少なく、1町（ヘクタール）ほどでした。畑では稗（ひえ）や麦などの雑穀を作り、米はあまり食べることができませんでした。昭和13年、小学校を卒業して間もなく荒川の開田事業が始まり、おじいさんに連れられて作業に加わり、19歳まで働きました。体も小さく、力もなかったので、泣きながら働きました。機械はもちろん一輪車も無い時代で、すべてが手作業でした。本当につらかったです。

【村上】18歳から21歳まで開田作業に加わりました。山から田んぼに運ぶための赤土を馬車に積んだり、畔（あぜ）を踏み固めたり、モッコで土を運んだりしました。話にならないほどつらかったです。男性は軍役に招集されたり、出稼ぎに出たりして男手が足りなく、多くの女性が働きました。このような苦労があって荒川、山田の発展があります。開田によりできたこの素晴らしい100町（ヘクタール）の田んぼは山田の財産。いつまでもこの風景は残してほしいですね。

■主な出来事

元号（西暦）	主なできごと
昭和元年（1926）	宮古・山田間を定期自動車が運行
昭和８年（1933）	三陸大津波で甚大な被害
昭和10年（1935）	国鉄山田線の盛岡―陸中山田間が開通
昭和11年（1936）	国鉄山田線の陸中山田―船越間が開通
昭和22年（1947）	山田町大火事
昭和23年（1948）	アイオン台風で被害
昭和25年（1950）	県北バスが通る 県立山田病院を開設